

《書評》

李曉東、2018『現代中国の省察—「百姓」社会の視点から—』東京：国際書院

内藤 寛子*

LI Xiaodong, Reflections on Modern China: A Perspective of “Baixing” Society, 2018.

NAITO Hiroko

1. はじめに

中国を理解しようと試みるとき、「言語」の捉え方に苦しめられる。それは、中国語を習得する難しさではない。評者の専門である現代中国政治を例にすれば、中国共産党は「民主」、「法治」、「自治」といった言葉を使いながら、一方で、中国共産党の命令的指導(1)を強調する。したがって、この「民主」や「法治」、「自治」は、欧米で発達してきた政治学の用語でいう democracy や rule of law、self-government ではない。かりに、中国共産党の命令的指導を強調し、それらの言葉が意味するものは中国では実現しておらず、結局は、中国共産党の主張するところの「民主」、「法治」、「自治」は意味をなさないと結論付けるとするならば、それも現実の中国を描写できていない。なぜなら、建国以降の歴史の変遷から鑑みれば、中国は開かれた政治、経済、社会空間を有するようになってきていることは紛れもない事実であるからだ。

それでは、一体、中国共産党の命令的指導下にあるそれらの言葉をどのように理解すればよいのであろうか。このような問題は「西洋に源をもつ『普遍』的な理念と長い歴史の中で形成された中国の『特殊』な伝統や文化との間のずれ」によるものだと筆者は言う。そこで、本書は、歴史的連続性に注目し、中国で醸成された政治思想がどのように前近代から近代へと継承され、そして現代に生かされているのか、という問いを「普遍」的な価値を念頭に置きつつ、中国の「特殊」性とその特徴から明らかにしている。特に、中国の人々の政治観や法制度をめぐる認識を検討することができる「法治」と「自治」の議論に着目した。

本書の結論を先取りすると、西洋で捉えられてきた国家と社会の対立構造は中国で形成されず、中国において、国家と社会は調和を目指しており、国家と社会の間には「曖昧さ」が存在している。

* 東北アジア研究センター

これが中国の政治社会状況の特殊性であるという。この「曖昧さ」の議論は、筆者も指摘しているように、加藤弘之の著書(2)ですでに論じられている。先行研究を踏まえた本書の最大の特徴は、この「曖昧さ」が中国でどのように作り上げられ、継承されていったのかを描き出している点にある。その結果、本書は、中国の「言語」を使いながらも、西洋とはまた違った、しかし西洋との比較検討が可能な普遍性をもつ概念構築に成功している。

本書の章立ては以下の通りである。

第一章：「百姓」から語る現代中国

第二章：「生」と「易」からとらえる伝統

第三章：デモクラシーと立憲原理の再考

第四章：立憲の中国的論理

第五章：厳復と立憲政治

第六章：「双軌政治」、「協商民主」と現代中国

第七章：現代中国社会の課題と社区

第八章：中国における「公」の伝統

第九章：国家と社会の間のキー・パーソン

第十章：総括と展望

2. 本書の概要

以上のような章立てを踏まえ、本論部分となる第二章以降の内容を簡単に紹介したい。

第二章では、本書の分析枠組みとなる中国の人々の「生」をめぐる価値観と、人々の世界観を規定する「易」について、西洋の理念と比較検討しながら論じた。「生」とは「生きること」を意味する。西洋での「生」は個人に帰着し、「家」や「国家」とは鮮明な対照をなしている。一方で中国における個人の「生」は、初めから人間関係のネットワークに埋め込まれており、「家」や「地縁」といったその先の関係につながる起点として存在した。そして、本書は、この起点となる視点(=百姓の視点)から「生の共同体」について考察すると説明した。「生」に加えて、もう一つの伝統的な考え方が「易」である。「易」とは、中国が進化論を受容する以前に、政治社会の動態を理解するために用いられた伝統的な価値観である。西洋において、自然法は神によって権威づけられているが、中国的な自然法は「易」によって理論化された。「易」はウェスタンインパクトを経てもなお続いている中国の価値観であるという。

第三章では、中国の政治的統治の特質について、権力乱用の防止とデモクラシーの原理について西洋の場合と対比させながら論じた。中国においても、民本思想をはじめとした儒教の伝統から、西洋と相似したデモクラシーの原理を導き出せることを説明した。そして、そのような思想がありながらも、それを保証する制度(=議会)に出会ったのは、ウェスタンインパクトの時であった。しかしながら、西洋の議会制度を中国がそのまま導入したわけではない。中国は、西洋と同

様に議会制度の役割を権力の制限であるとする一方で、西洋と異なり、その役割は権力間の調和を重視することでもある、と考えた。

第四章では、儒教の「通」という論理について、思想面では「易」から、制度面では「封建・郡県」制から論じた。「易」において、「上下」や「君臣」間が「相通」ずることは、天地、万物の間の「交通」と同じであることから、「上下」関係は一方通行ではなく循環であるという。その循環が「通」であるという。また、分権的な封建制と集権的な郡県制については、前近代の多くの論者によって議論された。その後、これらの考えは立憲制の議論に取って代わられたと看做されやすいが、筆者は、中国が「封建・郡県」制と立憲制という二つの性格を交錯させながら独自の政治構想を打ち立てていった、と主張する。

第五章では、第四章で検討した議論がその後の立憲に関する議論へどのように継続したのかという点について、厳復を事例に考察した。厳復は、「責任ある政府」は人民の自由を制限すると考え、自由があるということは、放任な政府を意味すると論じた。また、厳復は、代議制が国民の自由を体現し保障する機関ではなく、政府を監督し、政府に責任を持たせるための監督機関であると位置づけた。そして、中国には治める人が治められる人によって選ばれるという発想がなかったことから、厳復は、議員代表制という目標を据えながらも、まずは民権の伸張を象徴する地方自治の実施が急務であると主張した。

第六章では、第四章から続く立憲に関する議論が近代を経て、どのように現代へと継承されていったのかについて論じた。現代の知識人に共通する点は、第一に、清末以来の議論の延長線上で捉えているということ、第二に、西洋に何を学ぶのかを考える際に固有の政治的文化的伝統から出発しているということである。第三に、「通」という儒教思想と、法を統治の道具であるとする考えを結合させて中国における近代的立憲政治の可能性を見出そうとした。筆者は、中国共産党の支配の正当性を問う際に、制度のみに注目するのは不十分であり、中国共産党の代表制の問題にも視野を向けなければならないと主張する。そこで、中国共産党の代表制を担保する「協商民主」に注目した。「協商民主」とは選挙民主と相互補完する民主の形式である。

第七章では、「自治」の課題を検討する際の最も適当な事例である都市部のコミュニティ（「社区」）に注目した。その中でも居民委員会は、国家と社会の間の曖昧な関係を紐解く鍵となる。まず、公共性を、上から下への垂直関係を表す「オオヤケの公」と人と人の水平的な関係を指す「共同、公共の公」に分け定義した。次に、社区の形成過程について、市場経済化の進展により、これまでの単位社会が機能しづらくなり、末端の行政組織として街道弁事処と自治組織である居民委員会が設けられたことを論じた。そして、それぞれの社区の性格として、単位と流動人口の影響に左右されていること、また社区内部で階層化が起きていることを指摘した。現在、社区が抱えている問題として、社区に対する国家の過剰介入と「共同、公共の公」に対する市民の無気力を挙げた。

第八章では、基層社会の「公」の形成過程における国家と社会との間の関係の特質を明らかにするため、歴史に遡って、国家と社会との「曖昧」な関係の実態とその性格について確認した。伝統

中国の「国家・第三領域・社会」に対応するアクターは「官、紳、民」=「君・官僚、郷紳、百姓」である。伝統中国における「公」と「自治」は、王朝体制の弱体化による地域社会に対するコントロールの弱体化によって形成された。そして、国家が過度に介入すると社会の自立性が機能しなくなるとのことと、国家と社会をつなぐ媒介者がキー・パーソンとして存在することが分かった。

第九章では、現代中国における「自治」のあり方、特に社区内各アクターの結節点である「居民委員会」の実態について考察した。居民委員会の業務は、国家によって推進されている行政業務（エリア（網格）化管理と社区事務）および自治活動がある。居民委員会は、かつての郷紳と異なり、「オオヤケの公」の権威性に大きく依存している。ばらばらな個人が繋がりを形成するには、「オオヤケの公」が必要であることから、基層社会において、国家をいかに拒否するべきかという視点よりもどのように協働を実現するかという視点は重要である。そして、国家社会関係の協働の姿を見ていくと、居民委員会に所属する住民が党という資源を利用し、また人代制度と連携することで居民委員会の活動を活発化させていることが分かった。

第十章では、これまでの議論を総括した。まず、「生」の伝統から見えたものとして、三点の特徴をまとめた。第一に、人々は「生」のために互いに繋がりが「共同、公共の公」を形成した。第二に、そのような「共同、公共の公」は、自分たちの「生」に役立つものとして、絶えず追及されている。第三に、そのような「共同、公共の公」は、国家の過度な介入により硬直化してしまう。次に、易の伝統から見えたものとして、「通」という伝統的な特徴は現代中国における協商的民主という形で継承されていると論じた。

3. コメント

筆者は、政治思想史を専門とし、本書についても『現代中国の省察』という題目でありながらも、多くの紙幅は歴史的な思想史の変遷に割かれている。特に重要となる本書の理論的構築は、中国の伝統的な概念に依拠していることから、全くの門外漢である評者からすると、本書の理解は相当地難しく、また筆者の表現方法に理解が追いついていない部分があるように思う。したがって、評者は筆者の主張を誤読している可能性が否めず、以下で指摘するコメントは的外れであるかもしれないが、読了後に湧いたいくつかの考えについてまとめようと思う。

第一に、歴史的連続性の要因についてである。筆者は、中国における政治思想が、ウェスタンインパクトを決定的契機として大きくパラダイムシフトしたという従来の考えに疑義を唱えている。そこで、中国の伝統的な価値観である「生」と「易」に注目し、それが近代から現代へと継承されている様を描き出した。また、その継承は単純に発生したわけではなく、ウェスタンインパクトによって輸入された様々な制度設計を取り入れながら、独自の発展を遂げたという。筆者は「どのように」中国の伝統的な価値観が引き継がれたのかについては検討している一方で、それが「なぜ」起こり得たのかについてはあまり論じていないように思う。ウェスタンインパクトが決定的契機であったという議論へのアンチテーゼを提示するのであれば、この現象に対する因果的推論

の必要性を感じる。

第二に、非連続性をどのように理解するのか、という点である。居民委員会を国家と社会の結合点と捉えて、現代中国における国家と社会の間に存在する曖昧性について議論した。しかし、本書においても筆者は、居民委員会の役割を、かつての郷紳と完全に重なり合わせることはできない、と述べている。その理由として、第一にリーダーの権威の由来が異なること、第二に国家によって設立した居民委員会と異なり、郷紳は行政官僚と距離を取り、官から相対的に自立していたこと、第三に、郷紳は百姓と多くの利害関係を共有していたことと説明した。このような非連続性を政治体制の違いによるところがあるという簡単な説明に留めているが、なぜこのような違いが発生するのかを掘り下げて論じる必要があるように思う。なぜなら、この非連続性への理解が、両者を比較対象としてふさわしいか判断する基準になるように思うからである。そしてこの点は、そもそも前近代から近代、そして現代への歴史的連続性の根拠を揺るがすかもしれないと考える。何が連続して、何が連続していないのかを明確化させる必要性があるように思う。

第三に、現代中国における「自治」あるいは「法治」を描き出すためには、その条件を明らかにする必要があるのではないだろうか。評者が研究対象としている権威主義体制下の法治について例を挙げるならば、権威主義体制下において法治の度合いと政治的自由度は必ずしも相関しないことが分かっている(3)。つまり、比較的に開かれた権威主義体制にあっても法治の度合いが低い地域もあれば、中国のように閉ざされた権威主義体制にあっても法治の度合いが比較的高い地域もあるということである。この際に問題となるのは、法治を選択する、あるいは選択しない条件は何か、ということである。

評者も筆者の理解と同様に、中国には中国独自の「自治」や「法治」の捉え方があると考え。そして、それらは、国家と社会の対立構造では捉えきれず、両者が重なり合う場の理解が必要である。しかし、このような国家と社会の間の曖昧な存在というのは、現代中国政治研究において既に共通見解となっている。この共通見解の先にある新たな問いとは、既述したような選択の条件にあると評者は考える。本書の内容に照らして考えるならば、居民委員会の「自治」活動に対する国家の介入の条件や、住民が党の資源を利用する条件などである。この条件が解明できれば、国家が介入する、あるいは住民が党の資源を利用する中国型の「自治」と、国家が介入しない、あるいは党の資源を利用しない自治(self-government)が混在する中国社会をより鮮やかに描くことができるのではないだろうか。そして、このような条件の解明は、現代中国に限定することなく、歴史的な事象においても検討できると考える。

4. おわりに

コメントの冒頭でも述べたように、本書は非常に難解であった。しかし、精読をしていくと、知恵の輪がするすると解けていくように、中国の伝統的な価値観である「生」や「易」、「通」といった考え方を捉えられるようになる。非常に難解な内容を平易な言葉と明快な論理構造で説明して

いる筆者の能力の高さに驚かされる。

また、中国の政治思想史に関する叙述を読み進めていくにつれ、政治学の理論を学んでいるような感覚を得た。中国独自の言葉の先にあるかつての知識人らが捉えたかったこととは、同時代的に様々な地域で検討されていた政治構造であったように思う。そこから考えると、中国から生み出される知見や見方によって、世界で発生する現象をとらえる動きが出てきても良いのではないだろうか。本書は、政治思想史や中国に興味関心を持つ方だけでなく、幅広い層の読者に読んでいただきたい一冊である。

注

- (1) 中国共産党の「命令的指導」は、中国語で「領導 *lingdao*」と表し、「指導 *zhidao*」と区別して用いられている。英語においては、「leadership」と訳し、「指導」を意味する「guidance」と区別される。しかし、日本語は、「領導 *lingdao*」に相当する表現がないことから、中国語の「領導 *lingdao*」も「指導 *zhidao*」もすべて「指導」と訳されることが多い。筆者はそれを踏まえて中国共産党の「領導 *lingdao*」という言葉を用いているが、本稿の目的は本書の内容を多くの方々に理解していただくことであるため、あえて中国語である「領導 *lingdao*」は使わず、「命令的指導」という言葉を用いることとする。
- (2) 加藤弘之、2013『「曖昧な制度」としての中国型資本主義』東京：NTT 出版。
- (3) Yuhua Wang 2016, *Tying the Autocrat's Hands (Cambridge Studies in Comparative Politics)*, Cambridge: Cambridge University Press.